

# 「べし」の意味変化と主観化

奥田 智樹

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

[okuda@lang.nagoya-u.ac.jp](mailto:okuda@lang.nagoya-u.ac.jp)

## 1. はじめに

本発表は助動詞「べし」の通時的な意味変化の動機付けをどのように捉えたらよいかを明らかにすることを目的とする。「べし」は上代の文献資料にすでに現れ、その後意味や機能に変化は見られるものの、今日なお用いられる助動詞である。とは言え、上代には非常に多義であったこの助動詞も今日ではかなり意味が狭まり、かつ変質している。こうした通時的な変化に主観化という観点から解釈を与えたいと思う。

古語の「べし」は「推量の助動詞」と呼ばれることが多いが、同じく推量の助動詞と呼ばれる「む」、「らむ」、「けむ」と比較すると、単に話し手の主観性のみを表すと言いきれないところにその特色がある。非常に概略的に述べると、「推量」、「意志」、「命令」などの意味には話し手の主観性が現れやすいが、「当然」、「適当」、「可能」、「義務」などの意味はより客観的な内容であると言える。「べし」の持つこの意味論的な二面性については、これまでも中西(1969)の「様相的推定」と「論理的推定」、『古語大辞典』(1983)の「表現主体の情意の表現」と「客体的な表現」、大鹿(1999)の「作用的意味」と「对象的意味」などの形で、様々な観点から指摘されてきた。例えば、『古語大辞典』(1983)では(1)の「べし」を「表現主体の情意を主体的に表現している」ものとし、(2)の「べき」と(3)の「べく」を「客体的かつ客観的表現」と述べて、時枝文法で言えばそれぞれ辞(助動詞)と詞(接尾語)に相当するとしている。

(1) 家に行きていかにかあがせむ枕づく妻屋さぶしく思ほゆべしも (万 5,795)

(2) 解由<sup>げゆ</sup>など取りて、住む館<sup>たち</sup>より出でて、船に乗るべき所へ渡る (土佐 12/21)

(3) 梅の花咲きたる園の青柳はかづらにべくなりにけらずや (万 5,817)

発表者は OKUDA(2007)においてこの詞辞論と文法化の概念に基づく「べし」の意味分析を試みたが、詞と辞の意味論的な違いを細部にわたって明確にすることには限界があった。そこで本発表では、新たに大鹿(1999)の「作用的意味」と「对象的意味」という指標に依拠してこの二面性を捉えることにする。そして、この指標の他に「現実内事態」と「現実を離れた事態」という別個の指標を設けて、この二つの指標

を用いて「べし」の意味変化の動機付けとなる主観化の内容を明確にしたいと思う。取り上げるのは連用形「べく」、終止形「べし」、連体形「べき」の三つの活用形である<sup>1</sup>。また、古語の用例は全て万葉集から引用したものである。

## 2. 「対象的意味」と「作用的意味」

大鹿(1999)によれば、「べし」の「対象的意味」とは、「べし」が対象に「ある事態が内在している状態」を表していると解釈される場合である。そしてその「状態」には「ある事態がまもなく出来る潜勢的な状態(潜勢)」「ある事態が可能な状態(可能)」「価値的な事態が内在する状態(適当)」「規定的な事態が内在する状態(許可・義務)」の四つがあるとしている。

- (4) 通るべく雨はな降りそ我妹子が形見の衣我下に<sup>け</sup>着り (万 7,1091)
- (5) 帰るべく時はなりけり都にて誰が手本をか我が枕かむ (万 3,439)
- (6) 駿<sup>しるし</sup>なきものを思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし (万 3,338)
- (7) まつろはず立ち向ひしも露霜の消なば消ぬべく行く鳥の争ふはしに (万 2,199)

そして大鹿(1999)は、「対象的意味」に属するこの四つの意味のうち、「適当」、「許可・義務」の意味は対象の価値的、規定的側面を表しているという点で「潜勢」、「可能」の意味から価値的な変質を遂げていると述べている。

それに対して「作用的意味」とはある事態が言語主体たる話し手の作用によるものと解釈される場合であり、「言語主体の世界の捉え方にかかわる意味」を表す場合である。(8)(9)の「べし」はいずれも「作用的意味」の例である。

- (8) 言問はぬ木にはありともうるはしき君が<sup>たな</sup>手馴れの琴にしあるべし (万 5,811)
- (9) 風吹きて海は荒るとも明日と言はば久しくあるべし君がまにまに (万 7,1309)

そして、活用形に関して大鹿(1999)は、「べく」は常に「対象的意味」を表すが、「べし」と「べき」は「対象的意味」と「作用的意味」の両方を表し得ると述べている。

ある事態を対象に内在すると捉えるか(=「対象的意味」)、あるいは言語主体た

---

<sup>1</sup> 「べし」の活用形にはこのク活用の他にいわゆるカリ活用「べかり」が存在するが、カリ活用は「べくあり」の約で出来たものであり、「べし」以外に「あり」の要素を含むので、ここではク活用の三つの活用形のみを考察の対象とする。

る話し手の作用によるものと捉えるか(=「作用的意味」という区別は、言い換えれば話し手がある事態を発話時点において既定のものとして承認するか、あるいは発話時点において自ら創出するかの違いに相当する。ここで留意しておきたいのは、事態に対する話し手の関わり方である。「作用的意味」は話し手による事態の創出を含むため、「対象的意味」より事態に対する話し手の関わり方が大きいことは明らかだが、この「対象的意味」の内部においても「適当」、「許可・義務」の意味については話し手の価値判断が前提として関わっているため、「潜勢」、「可能」の意味よりも事態に対する話し手の関わり方が大きいと言える。

一方、事態と現実世界との結びつきを考えると、新たな意味分類の指標を設けることが可能である。すなわち、大鹿(1999)の分類に従えば「対象的意味」に属する「潜勢」と「可能」および「作用的意味」の場合については、話し手はその事態が現実世界に生起するものと見なしているが、「対象的意味」に属する「適当」、「許可・義務」の場合については、話し手の価値判断を前提としているため、話し手はその事態を単に頭の中で考えているのみで、現実世界に生起するとは考えていない。このことを踏まえて「現実内事態」と「現実を離れた事態」という指標を新たに設け、「対象的意味」と「作用的意味」という指標と合わせて、「べし」の意味変化を考える上での手がかりにする。

### 3. 現代語の「べく」、「べき」

今日では「べし」が文末に用いられて「ただちに練習を始めるべし」のように命令の意味を表すことがあるが、擬古文的な固い表現である。今日主に用いられるのは「べく」と「べき」である。しかしこれらも古語に比べると意味が狭まっている。

「べく」はまず「べくして」の形で(10)のように当然のなりゆきを表す。この場合には古語における「潜勢」や「適当」という「対象的意味」を残していると見なせる。

(10) 起こるべくして起こった出来事だ。

また、今日「べく」は(11)(12)のような可能な動作・作用あるいは実現の可能性のある事態を述べる場合に多く用いられる。

(11) 今年中に完成すべく、最善を尽くす。

(12) 現在の生産量を維持すべく、努力する。

この場合には、「べく」の構成する連用修飾語は意志動詞を修飾し、「ある」「なる」「見える」「思う」のような状態(変化)動詞、知覚動詞、思考動詞を修飾することはない。従って、この「べく」が何らかの対象の状態を述べているとは単純には考えにく

い。しかしこの場合にも、意志動詞の動作主に内在する状態を、話し手が自らの価値判断を前提に述べていると見なすことができると考えられる。そう考えれば、この場合も動作主についての「対象的意味」を表すと見なせるはずである。

一方、「べき」はまず(13)(14)のように当然のなりゆきやそうなるはずの事柄を表す。この場合には(10)の「べく」と同様に「潜勢」や「適当」という「対象的意味」を残している。だが、「べく」も「べき」も今日「可能」の意味は失っていると思われる。

(13) 花は散るべき運命にある。

(14) 少年犯罪の増加は恐るべきことだ。

また「べきだ」、「べきである」などの形で(15)(16)のように「義務」の意味を表す。

(15) 会社は欠陥商品の責任をとるべきだ。

(16) 無責任な批判はなすべきではない。

この場合の「べきだ」、「べきである」は、やはり前接する動詞の動作主に内在する状態を、話し手が自らの価値判断を前提に述べていると見なすことができる。従って、やはりこの場合にも「べき」は「対象的意味」を表すと見なすことができる。

このことから、今日「べく」と「べき」は常に「対象的意味」を表すと見なすことができる。以上のことから「べく」と「べき」の通時的な意味変化を考えると、「作用的意味」を失い「対象的意味」だけを持つようになっていく、「対象的意味」の内部では「潜勢」や「可能」の意味が弱まり「適当」や「義務」の意味が強くなっているという二つの特徴が見出せることが分かる。この は話し手の価値判断を前提としない意味から前提とする意味へという変化として、また は「現実内事態」から「現実を離れた事態」への変化として説明することが出来る。この両者は違ったレベルでの主観化と認められるはずであり、「べし」の意味変化にはこの二つの主観化が同時に働いていると解釈できるのである。

#### 参考文献

大鹿薫久(1999): 「「べし」の文法的意味について」, 『森重先生喜寿記念 ことばとことのは』, 和泉書院, pp.51-71.

OKUDA, T (2007): La polysemie de *beshi* et la grammaticalisation, 『名古屋大学言語文化論集』 28-2, pp.41-52.

中西宇一(1969): 「「べし」の意味 - 様相的推定と論理的推定 - 」, 『月間文法』 2-2, 明治書院, pp.117-123.

『古語大辞典』(1983), 中田・和田・北原編, 小学館.